

りました。事情はほぼ推察がつくのですが、やはり生徒自身で解決する外はないでせう。しかし、小生は青年が好きです。青年のムキな気持は愛すべきです。」と記していることから分かる。なお、翌二十三年八月十二日同人宛てのはがきには「先日石井鶴三氏が助教の笹村草家人氏等と御一緒に来訪、久しぶりに鶴三氏におめにかかつて愉快でした。去年あたり彫刻科の生徒さんがいろいろな事を訴へる手紙をよこしましたが、笹村氏に會つて、そのいはれがよく分るやうに思ひました。今ではもう彫刻科も落ちついてゐる事でせう。」と書いて、彼は生徒たちに同情的だったようである。

反対派生徒たちは、このように光太郎に手紙を出す一方、世の注意を喚起しようと試みた。すなわち五月十日の新入生歓迎会の席上、彼らは石井教室反対の宣言をなしたのである。新聞記者がここに駆けつけ、翌日の新聞には早速記事が登場した。反対派生徒の父親でGHQに関係を持つ一画家が乗り出して、「超国家主義」の言動のある笹村を排斥すべく前出の「伝心録」を提出させたのもこのときである。彫刻科は正に混乱状態となった。

前々から事態を憂慮していた校長は、平櫛教授に善後策を依頼していたのだが、平櫛はこの十日に校長室を訪れて、石井に「おとなしい女房役」をもう一人持たせ、自分の方には菊池一雄を新規採用したいと申し出た。そのため、校長は十三日、石井および菅原安男、西本順らと談義し、平櫛案に則して山本豊市、菊池一雄の両名を採用して他日もう一教室増設してもよいという決定を下した。そして、直ちに準備を始め、一方では西本や西田正秋が生徒の相談役として親しく対応した。こうした措置がとられた結果、左記の岩田

氏の日記にも明らかのように、二十二日には漸くにして反対派も妥協するに至ったのであった。

22・5・22 校長、西本先生、四時、帝室博物館食堂に、村井、小坂、阿井、中野、野崎、岩田を呼び、妥協案提示。すなわち、平櫛教室に新作の菊池一雄氏、院展の山本豊市氏を招き、指導を仰ぐ。行く行くは石井教室と対等の教室とする。但し、菊池氏は京都の絵画専門学校〔現京都芸大〕の教授を引き受けたばかり故、無理は利かないと思う。

之以上校長先生に迷惑かけたくないので、この辺で折合う事になる。それから校長先生と雑談。六時半迄。

翌二十三日、生徒たち十五、六名は連れ立って東北沢の菊池一雄宅を訪れ、早期着任を懇請。六月十六日には菊池、山本両者に講師の辞令が下りた。その後、笹村が石井教室側の声明書（反対派を激しく糾弾するもの）を公表しようとしたため、生徒が再び反対行動を起こしそうになり、校長が公表を差し止めるなどのことがあったが、新任教師、特に山本豊市が親切に指導にあたったことや、反対派生徒の多くが卒業制作に専念するようになったことなどにより、反対運動は終結した。

② 天竜峽に分校設立計画

天竜峽の景勝地に建つ仙峽閣は純和風の風情豊かな旅館であった。原彰一著「仙峽閣物語」（『週刊いいだ』平成元年六月二十二日、信

濃毎日新聞社)によると、大正十三年開業の年には本校にゆかりの深い今泉雄作が瀬川独活王を連れて訪れ、水墨画を遺した。昭和二年飯田線開通とともに東京から文人も多く訪れるようになり、その宿帖(原彰一氏蔵)には中村不折、池上秀敏、石井柏亭、頭山満、三木清、東畑精一その他著名人の名が記されている。本校関係者では昭和十年に結城素明が訪れて竜角峯の画を遺し、同十五年に川合玉堂が訪れてむささびの宿と命名し、翌十六年には香取秀真および北原大輔、三佳兄弟が訪れている。旅館の主人原梯蔵は美術愛好家で、旅館の経営は姉に任せて自分は東京牛込に美術、工芸関係の事務所を設け、昭和十年天竜峡美術協会を作り、作家たちと交流した。特に中村不折と親しく、太平洋画会のメンバーを宣伝を兼ねて仙峽閣に無料で泊めるなどした。彼は昭和十四年には高島屋美術部と共同して東都大家日本画洋画彫刻展を開き、以来作家たちとの交流が深まるとともに新たな計画が芽生えた。

昭和二十二年十月十八日、上野直昭と脇本楽之軒は飯田の菱田春草三十七回忌列席を終えて原の勧めにより仙峽閣を訪れ、三日間逗留した。そこで原は天竜峡に美術館を作り、本校の分校を付設する計画を提案した。天竜峡の川路公園の松林の中に戦時中豊川海軍工廠の疎開工場となっていた建物が数棟散在して放置されていたので、それを分校の校舎にしようというのであった。上野らは高山宿舍(当時はすでに継続困難の事態が生じていたのであろう)の例もあることから、計画に乗り気になり、帰京後文部省との交渉に着手した。このことは上野の日記にも記されている。その際、上野が原に提出を求めた天竜峡美術館趣意書と上野の手紙が現存(同じく原

氏蔵)しており、それには美術館建設費として五一〇万円、本校分校(百坪)建設費として百万円、その他二七五万円が計上されている。

しかし、文部省との交渉は成功せず、原の事業も破綻し、分校設立計画は立ち消えとなった(本項については原彰一、市瀬幸助、飯田市文化会館滝沢正幸の各氏に資料提供等ご協力を頂いた)。

② 鶴ヶ島農場

戦後の食料難対策として本校も他校に倣って農場を開設し、次の耕作者募集を行なった。

昭和廿二年五月二十一日

東京美術学校生徒課長

殿

一、鶴ヶ島農場耕作に関する件

過般文部省は學徒自活の一助と勤勞教育擴充の目的を以て埼玉縣鶴ヶ島に農場二十町歩を創設し希望學校に分割貸與されることになりましたので、本校では右農場一町歩を借り受けました。就きましては耕作御希望の有無を五月三十一日(土)迄別紙要項により御回答を下さる様御願ひ致します。

一、場所 埼玉縣入間郡鶴ヶ島(東上線池袋より寄居行、坂戸駅下車)

一、常住の管理者(石井)が居ます。

一、宿舍及農具の設備あり。

[下略]